

報告書（UCI 国際コミッセールのための実践的講習会）

名称

2006年度UCI国際コミッセールのための実践的講習会
2006 Practical Seminar for UCI International Mountain Bike Commissaires

期間

平成18年8月22日（火）～平成18年8月28日（月）

場所

ロトルア ニュージーランド

概要

ニュージーランド、ロトルアで開催された世界マウンテンバイク選手権大会の会期にあわせてUCIのコミッセル・ユニットが主催してパネル・メンバー養成向けの講習会を開催。

参加者

講師:ピエール・ブランチャード（カナダ）

受講者:ピラキ・バイサック(インド)、ビートレス・ラジャワ(マレーシア)、ホン・ロン・レオン(マカオ)、ウォルター・ユー(香港)、高橋 博(日本) 参加者には、他にスリランカのメンバーがいたが査証の関係で現地に到着できなかった。

内容

今回は、行き帰りを日本選手団とともに行動したために数日前に到着し、4X コースなど事前に視察を行った。ホテル集合で、簡単な自己紹介の後IDを取得するために大会事務局受付に移動した。その後ダウンヒル、クロスカントリー4Xとそれぞれの各ポイントを期間中にわたり巡回して各ポイントで説明が行われ、毎日解散前に質疑応答などがある。スコアリングや、ラップカウント、ステーjingなどの実践について実際の作業は行わないかとの問いに関しては、今回の目的はそれらを監督するものの講習であるために、その部分については特に行わないとの説明であった。今回の講師ブランチャードは、私の受講したマレーシアでのコミッセル講習会でも講師を務めており、世界選手権などでコミッセルを経験し、現在は、特に養成関係について担当している。

●レジストレーション:



前々日に同行した日本チームの受付

ここでは、今回のセクレタリである、デビッド・ジャドソン氏(ニュージーランド)が同じく説明にはいり、世界選手権大会

においては、各国毎のBOXを作り、その中に選手毎のバック(ナンバープレート、ボディーナンバー、他配布物)を作成して、アルファベット順に並べておき、ライセンスおよびパスポートから、各国毎のリストにより、それぞれの名前、年齢、配布ナンバーを逐一、確認した後に受け渡すとのこと。

特に注意したいのは、年齢(エリート、ジュニアの規定にあっているか?)、名前(姓名の順やミドルネームなどにより、今回も一部、日本選手の国際ポイントがスタートリストに反映されていなかった)である。

次に、別のテーブルで、ナショナルジャージの確認が行われた。これには、UCIが用意した登録ファイル(カラーコピーのもの)を使用する。(ここにきてより厳しくなっており、国によってはクロスカントリーとダウンヒルの2タイプを登録しており、長袖時のデザイン上のトラブルを避けているようである。)

次に、IDカードを作るが、プラスチックカードへのプリンタで顔写真も載せるようになっており、以前に登録されている人はデータベースの写真より作成するが、新しい場合はこの場で撮影をする。(大会会場では非常に厳しく、各ゲートや入口では警備があり、確認できない場合は中にはいることは出来ない。)

参加リストと、ライセンスおよびパスポートとの名前、生年月日の照合
本大会で着用するナショナルジャージの確認
ID(アクレデーション)カードの配布

●ダウンヒル競技

スタート地点



ウォーミングアップ・テント前の時計表示

ステージングでは、テント前に時計を置き、選手のスタート時間遅れがないように対応していた。ステージングでいない選手に対しては、基本的には出来る限り時間に間に合うように、ナショナル・コミッセールがテント内に捜していたりした。これには、もちろん参加競技者の使用言語がさまざまであるという事情もある。



スタートを待つ競技者とスタートコミッセール、タイミング担当、アシスタント・プレジデント・コミッセール。



後輪部分に、反動などをつけてスタートしないようにバーが設置してあった。



見えにくいですが、計測器のスタートバーは1本であるが、連結して2つのスイッチにつながっており2回線で計測を行っている。また TISSOT タイミングのスタッフがマニュアル・スイッチを使ってスタート時間計測も行う。
左はスタート・コミッセル。トレーニング、本戦を通してマーシャルへの指示は、スタートコミッセルが行っていた。国内では、チーフが取っている場合が多いが、特にダウンヒルでは、スタートを止めるという場合もあり、迅速な判断のために有効である。(チーフへは逐一 各事項報告を行っていた)



左のテープで仕切られた三角地帯は、セキュリティーゾーン。この場合は、コーナーの内側でもあり、次のポイントへの競技者の視線を遮らないためでもある。

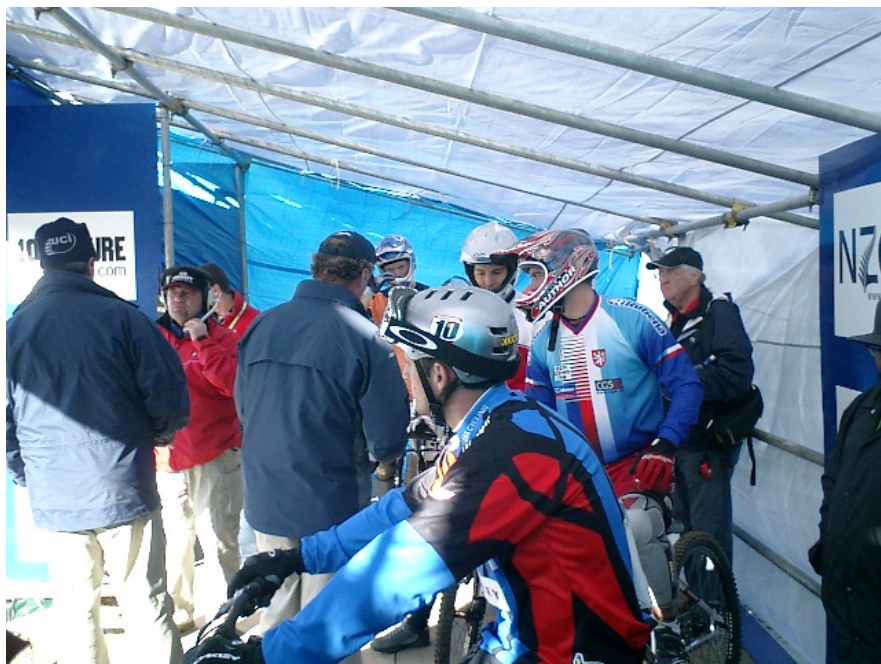


セパレートとなっているコースを上から。池越えがあるのが上級者コースで、約10m位先行できる。これは、トレーニングでの写真で、本戦では、観客用の追加セキュリティーゾーンが設置された。



ダウンヒルのドロップオフ。手前がセキュリティーゾーンで、大会スタッフと登録されたフォトグラファーが入っている。

●4クロス



トーナメント形式となる、ファイナルのMOTO1 組み合わせにより、一番手前の選手は予選1位の選手。予選順位で、ゲート位置を選べる形となるので担当コミッセルがチェックしている。



今回のコースは、特に高低差を利用して急な下りを設定しており、スピードも早くWジャンプなどの幅も大きめであった。距離もスピードにあわせて長目となっており、タイムは約47秒。

Rotorua, NZL
Aug. 25th, 2006

UCI MOUNTAIN BIKE WORLD CHAMPIONSHIPS 2006
4-Cross Men

1/16 Finals 1/8 Finals 1/4 Finals

Pos	Rank	Pos	Rank	Pos	Rank
1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31
32	32	32	32	32	32
33	33	33	33	33	33
34	34	34	34	34	34
35	35	35	35	35	35
36	36	36	36	36	36
37	37	37	37	37	37
38	38	38	38	38	38
39	39	39	39	39	39
40	40	40	40	40	40
41	41	41	41	41	41
42	42	42	42	42	42
43	43	43	43	43	43
44	44	44	44	44	44
45	45	45	45	45	45
46	46	46	46	46	46
47	47	47	47	47	47
48	48	48	48	48	48
49	49	49	49	49	49
50	50	50	50	50	50
51	51	51	51	51	51
52	52	52	52	52	52
53	53	53	53	53	53
54	54	54	54	54	54
55	55	55	55	55	55
56	56	56	56	56	56
57	57	57	57	57	57
58	58	58	58	58	58
59	59	59	59	59	59
60	60	60	60	60	60
61	61	61	61	61	61
62	62	62	62	62	62
63	63	63	63	63	63
64	64	64	64	64	64
65	65	65	65	65	65
66	66	66	66	66	66
67	67	67	67	67	67
68	68	68	68	68	68
69	69	69	69	69	69
70	70	70	70	70	70
71	71	71	71	71	71
72	72	72	72	72	72
73	73	73	73	73	73
74	74	74	74	74	74
75	75	75	75	75	75
76	76	76	76	76	76
77	77	77	77	77	77
78	78	78	78	78	78
79	79	79	79	79	79
80	80	80	80	80	80
81	81	81	81	81	81
82	82	82	82	82	82
83	83	83	83	83	83
84	84	84	84	84	84
85	85	85	85	85	85
86	86	86	86	86	86
87	87	87	87	87	87
88	88	88	88	88	88
89	89	89	89	89	89
90	90	90	90	90	90
91	91	91	91	91	91
92	92	92	92	92	92
93	93	93	93	93	93
94	94	94	94	94	94
95	95	95	95	95	95
96	96	96	96	96	96
97	97	97	97	97	97
98	98	98	98	98	98
99	99	99	99	99	99
100	100	100	100	100	100

ゲートのある所までは狭い階段となっていたため、手前にコミッセルがいてステージングを行っていた。そこには、表が掲示してあり、勝ち上がり者なども、そこに記入して配置されているコミッセル自ら確認する。



搬送には、ダウンヒル、4Xとも車が使用されていた。これで最大12台を運べる。搬送のコースは登り降りで分かれている所がありスムーズに運営できていたようだ。

●クロスカントリー

競技的には、国内で実施している形態とほぼ同じ。違う部分は世界選手権大会として特化している部分などがある。



トランスポンダー（計測用の発信器）はスタートの30分前までにスタート地点付近にあるところに取りつける。参加選手数が限られている（多くて100名程度、一日に2レースほど）ために、事前配布は行っていない。担当は、タイミングのスタッフ。



ステージング：15分前までに、スタート地点手前のボックスに入る事となっていた。4つ程度が設置されて、各ボックス20名くらい、入口にはリストを貼り付けてあり、ステージングで混雑しないように配慮されていた。



実際のステージング。従来よりも服装関係などに厳しくなっており、登録されていないジャージ、ウインドブレーカーなども着用は拒否される。今回は、特にチーフがこれを担当。



スタート直後の混乱、落車を避けるために、レーンがひかれている。



レーンにしたがって、選手を誘導しているコミッセール。



フィードゾーン。テクニカルアシスタンスも同じ所にある。この柵内には大会スタッフと認証済みの各チームスタッフ以外は入場できない。コースに沿って、右側がフィード、左が機材となっていた。それぞれの側でスタッフも必要であるが、各チームで十分な人員がいないので、その都度チームスタッフがコースを横切る形となる。いくつかのワールド・カップでも問題とはなっているようであるが、現状ではこれがベストということであった。世界選手権であればチーム数などの関係で問題は少ない。



テクニカルアシスタンスを利用している選手。同時に2名が入ってきた。左は、この部署担当のコミッセール。



80%。2名のナショナル・コミッセールと、1名のインターナショナル・コミッセールで担当。やり方は、日本と同じだが、機材もストップウォッチ、ラップ書取、ニッパ(トランスポンダー回収は今回、コミッセールがやっていた。後の質疑では、今回大陸が違うことでタイミングスタッフが少ないためであろうとのこと)のみで、シンプル。



スコアリング: 特に説明不要。



フィニッシュ後に設けられたTV用のスポンサーボード。

小さいように見えるが、TV写りではそれなりに見える。下は、誘導された選手へのインタビュー。誘導などの役割はUCIからの管理担当者による(白のベスト)



表彰ステージ: 柵内にはメディアのみが入場

できる。競技と同様に、ナショナルジャージにおける広告については事前にチェックを行う。帽子なども禁止しており、ジャージのポケットに入っていないかなどを行っていた。これはチーフが担当していた。



マネージャーズ・ミーティング:特に重要項目のみを説明するのみで、ディスカッションはしない方針。但し、質問などを遮ったり拒否することはない。



コミッセール・ミーティング:任命されている国際コミッセールとナショナルのメンバーで、毎日、マネージャーズ・ミーティング前に行われた。チーフを中心に当日の反省と、問題点、翌日の問題点を話す。コミュニケもチーフが作成して、このときに提案などをしていた。

総括

コミッセールの業務内容自体は、国内の全日本選手権大会クラスであれば、そう大差のないレベルであると思われる。中には、こうしたほうが効率的であると思えるようなことも多々あるが、これは国内の場合で、継続して同じ人がコミッセールをやっており、意志疎通がある程度のレベルにある中で生み出された方法であるので、今回のような世界選手権大会のように各大陸からの集合するコミッセールでの業務には、あてはめるのが難しい。

その、意味では、国内のコミッセールの能力は非常に高く、また経験も豊富であるために現状で満足のいくレベル、国際大会でも十分に通じるものがあると考えられる。

ただ、運営に対してのパワーといったものが異なるように感じられ、何よりも、国内にくらべると、違う国のメンバーが集まっているにもかかわらず、各問題点を解決するのに、「それは、私が確認しよう...」、「その点はこのように作業してはどうか?」、「手配は可能、数量は?」などという形で、それぞれの問題解決について志願者が多く出ることに驚きます。

一人一人の問題解決能力が高いこともあるのですが、大会を成功に導く意気込みというものが強く感じられます。国内でも、パワフルな方も多くおられますが、ますますこれを見習ってと思います。

大会は、途中でひょうが降ってきたり、所々雨という天候でしたが、大会側の非常に積極的な動きで、スムーズに進行されました。

言語能力が、どうしても低いために、さらに突っ込んだ質疑が出来なかったことも残念でしたが、非常によい経験の機会を頂いたことに、関係各位に感謝いたします。

今後も、このスポーツへ貢献できるようにと思いますが、重ねて、より多くの日本人コミッセールも、ぜひ、この輪の中に入って活躍して頂きたいと思います。

UCI国際コミッセール

高橋 博

2006/9/28

参考:大会公式サイト <http://www.2006rotoruantb.com/>